

平成 24 年度緊急雇用創出事業基金事業  
愛知県外国人コミュニティ母語教育等支援事業  
報告書

平成 25 年 3 月

愛知 外国につながる子どもの母語支援プロジェクト

## 目次

はじめに	2
I. 事業概要	3
1. 目的	3
2. 対象	3
3. 期間・内容	3
II. 母語について	6
コラム「愛知県外国人コミュニティ母語教育等支援事業について」	8
III. 母語教室の取組みについて	10
IV. 母語教育サポートブックについて	22
V. 母語教育に関する学習会について	25
VI. 母語教室交流会について	35
VII. まとめ	38

# はじめに

愛知 外国につながる子どもの母語支援プロジェクト

河村 槇子

(所属 特定非営利活動法人多文化共生リソースセンター東海)

「愛知 外国につながる子どもの母語支援プロジェクト」は、特定非営利活動法人多文化共生リソースセンター東海と NPO まなびや@KYUBAN が、愛知県の外国につながる子どもの母語教育を支援するために、平成 24 年に共同体として結成した団体である。

本団体は、平成 24 年度に、愛知県より「外国人コミュニティ母語教育等支援事業」を受託し、愛知県内で母語教育支援事業を実施した。本書は、その事業の報告書である。

現在、外国につながる子どもたちの中には、日本語も母語も十分に習得してバイリンガルとなり、社会で活躍している若者がいる。しかし一方では、日本語と母語のどちらも中途半端になってしまう子どもや、母語が身につかず、日本語のみが生活言語となっている子どもの存在も目立ってきている。

私たちは今までの活動で、外国人保護者や国際結婚の夫婦、外国につながる子どもたちと接する機会が多く、彼らとの関わりの中で、親子間でそれぞれのコミュニケーションの主となる言語が異なるために、家庭内でうまくコミュニケーションが取れなくなっていたり、日本語しか話すことのできない子どもが、日本語を上手に話すことのできない親を見下したりする、という事態が起きていることを知った。また、自らのアイデンティティに対する戸惑いが生じたときに、誰からも支えてもらえず、自尊心ややる気を失っていく子どもたちがいることも知った。

私たちは、それら家族間のコミュニケーション困難と子どものアイデンティティのゆらぎには、密接な関係があり、本事業の主題である「母語」が、重要な要因ではないだろうかと考えている。

実際に、自分の子どもの母語教育に関心のある保護者は多い。愛知県内には、「子どもに母語を教えたいが、家庭内だけでは限界がある」という保護者らが集い、地域で母語教室を開催している団体がいくつかある。こうした外国人コミュニティ内の取組みは、10 年以上前から行われてきており、母語教育や教室運営のノウハウを蓄積しているにも関わらず、日本社会はもちろんのこと、外国人コミュニティ内でもあまり知られていないのが現状だ。

私たちは本事業の実施に際し、これまであまりスポットライトがあたることのなかった、外国人当事者による母語教育の取組みを社会に広く周知するとともに、保護者や支援者間の情報交換と共有の場をつくり、子どもたちが、より良い環境で母語を学ぶことができるように努めた。本事業は 4 ヶ月間と限りのあるものであったが、その中でも一定の成果と、今後に向けてどのような取組みをしていくべきかを見出すことができた。

本事業の取組みが、今後の地域における母語教育活動の一助になれば幸いである。

# I. 事業概要

## 1. 目的

---

外国につながる子どもたちのアイデンティティの確立や親子のコミュニケーションを円滑にするためには、母語や母文化保持のための教育が必要であるとともに、日本語を学んだり、教科を学ぶ上においても、母語は重要な役割を果たすと言われている。しかし、子どもたちが母語を学ぶ機会や母語によって学習できる機会は少なく、また、その重要性については、あまり知られていないのが現状である。

そこで、外国人県民自らが、コミュニティ内において、子どもたちに母語や母文化を教えたり、母語による学習支援ができるよう、教室運営をサポートしながらモデル的に母語教育等の教室を開催する。

また、その中で発生した事例等を交えて、その意義や効果等を調査・分析し、その重要性を示すとともに、今後、こうした取組みを行おうとする外国人コミュニティの参考となるよう、具体的な実施方法等について、有識者等の協力を得ながら、マニュアル等を作成する。

## 2. 対象

---

愛知県内に在住の外国につながる子ども、保護者及び支援者

## 3. 期間・内容

---

本事業の実施期間（平成 24 年 11 月 29 日から平成 25 年 3 月 27 日）において、以下の 4 つの事業を実施した。

### (1) 母語教育等教室の開催

#### A. 国際子ども学校

- ① 実施場所 尾張旭市
- ② 実施会場 国際子ども学校
- ③ 対象者 フィリピンにルーツのある未就学児～小学生
- ④ 対象人数 14 人
- ⑤ 時間数 64 時間  
(毎週月～金曜日 10 時～14 時 30 分の間で週 5～6 回×40 分程度)
- ⑥ 対象言語 フィリピン語、英語
- ⑦ 教育内容 母語学習(フィリピン語、英語)、母語による教科学習、フィリピン文化学習

B. フロンティアとよはし

- ① 実施場所 豊橋市
- ② 実施会場 県営岩田住宅(ポルトガル語)、豊橋市青少年センター(スペイン語)
- ③ 対象者 ポルトガル語、スペイン語を母語とする小学生～中学生
- ④ 対象人数 13人 (ポルトガル語)、21人 (スペイン語)
- ⑤ 時間数 22時間 (毎週土曜日 14時～16時 11回×2時間)
- ⑥ 対象言語 ポルトガル語、スペイン語
- ⑦ 教育内容 母語学習 (ポルトガル語、スペイン語)、母文化学習

C. 華豊の友

- ① 実施場所 豊田市
- ② 実施会場 豊田市国際交流協会
- ③ 対象者 中国にルーツのある小学生～中学生
- ④ 対象人数 20人
- ⑤ 時間数 18時間 (毎週金曜日 18時30分～20時00分 12回×1時間30分)
- ⑥ 対象言語 中国語
- ⑦ 教育内容 母語学習 (中国語)、中国歌謡、中国舞踊

D. IPE QUINA (九番団地子どもポルトガル語・スペイン語教室「イペキーナ」)

- ① 実施場所 名古屋市港区
- ② 実施会場 UR都市機構 九番団地 1棟集会所
- ③ 対象者 ポルトガル語、スペイン語を母語とする未就学児～中学生
- ④ 対象人数 36人 (ポルトガル語)、8人 (スペイン語)
- ⑤ 時間数 54時間 (ポルトガル語)、18時間 (スペイン語) : (水曜日 16時～18時、木・金曜日 17時～18時/18時30分～19時30分、土曜日 10時～11時)
- ⑥ 対象言語 ポルトガル語、スペイン語
- ⑦ 教育内容 母語学習 (ポルトガル語、スペイン語)

E. PECLA (豊川市国際交流協会 ラテンアメリカ部会 教育プログラム「ペクラ」)

- ① 実施場所 豊川市
- ② 実施会場 ウィズ豊川 (豊川市社会福祉会館)、豊川市国際交流協会
- ③ 対象者 スペイン語、ポルトガル語を母語とする小学生～中学生
- ④ 対象人数 30人 (スペイン語)、15人 (ポルトガル語)
- ⑤ 時間数 各27時間 (毎月第1,第2,第3土曜日 14時～17時 9回×3時間)
- ⑥ 対象言語 スペイン語、ポルトガル語
- ⑦ 教育内容 母語学習 (スペイン語、ポルトガル語)

※ なお、各教室の活動報告は「Ⅲ. 母語教室の取組み」にまとめた。

## **(2) 母語教育サポートブックの作成**

母語教育サポートブック作成検討委員による検討会議を、事業実施期間中に 2 回開催し、有識者や外国につながる子どもの保護者等の意見を参考に、「母語教育サポートブック『KOTOBA』—家庭/コミュニティで育てる子どもの母語—」を作成した。冊子は 5 言語（ポルトガル語、スペイン語、フィリピン語、中国語、韓国朝鮮語）で作成し、すべてに日本語を併記した。冊子の内容及び構成等は、「IV. 母語教育サポートブックについて」を参照されたい。

## **(3) 母語教育に関する学習会の開催**

平成 25 年 2 月 24 日に、「オールドカマー、ニューカマー、それぞれの保護者らによる母語教育実践報告会～こどもに伝える わたしの言葉～」と題し、母語教育に関する学習会を開催した。学習会では、母語教育に取り組んでいる外国人自助組織 2 団体の職員を講師に迎え、それぞれの団体の活動の現状と課題について報告をいただいた。詳しくは、「V. 母語教育に関する学習会について」にまとめた。

## **(4) 母語教室交流会の開催**

平成 25 年 3 月 3 日に、各教室の成果を発表する場として、「あいち母語教室交流会」を開催した。交流会では、本事業の母語教室 5 団体に通う子どもたちが、母語で母国について紹介したり、ダンスや歌等で母国の文化を紹介した。詳細は「VI. 母語教室交流会について」にまとめた。

## Ⅱ. 母語について

本章では、外国につながる子どもの「母語」の重要性について述べる。

本事業における「母語」とは、「個人が最初に接触、あるいは習得する言語」のことを指す。なお、「母国語」は、「その人が属する国の言語」のことをいう。「母語」と「母国語」は必ずしも一致するわけではなく、その人の生育環境によって異なる場合がある。これをふまえたうえで、本事業における「母語」について述べたい。

現在、日本の学校に通っている、外国につながる子どもの中には、日常生活で母語や母国の文化にまったくふれる機会のない子どもがいる。そのような子どもの中には、母国に対して悪いイメージしか持っていない子どもや、自分のルーツを否定する子ども、親とコミュニケーションをとることができなくなっている子どもがいる。

そのような現状を直接的に経験し、危機感を感じた私たちは、子どもの保護者や支援者に対して、母語の重要性を伝える必要があると考え、本事業で作成した冊子「母語教育サポートブック『KOTOBA』」の中で、母語の大切さについて以下のように示した。主執筆者は、京都大学准教授の塚原信行氏である。文中にあるように、子どもが母語の力を伸ばすことを手助けすることにより、ひとりでも多くの子どもが安定したアイデンティティを得ることを促し、それによってもたらされる自己肯定感を足場として、さまざまな能力を伸ばすことのできるよう、このメッセージが多くの保護者や支援者へ届くことを願う。

(以下、「母語教育サポートブック『KOTOBA』—家庭/コミュニティで育てる子どもの母語—」より抜粋)

---

### 「母語は大切です」

#### 人間は「母語」を通じて社会との最初関係を築きます

「母語」とは、ある人間が初めて覚えた言語のことをいいます。あなたは、生まれて初めて自分が発した言葉（単語）を覚えていますか。おそらく覚えていないでしょう。でも、自分の子どもが、生まれて初めて発した言葉は覚えているのではないのでしょうか。言葉だけでなく、その時に感じた大きな喜びも覚えているのではないのでしょうか。自分の子どもが言葉を発したことが、どうしてそんなに嬉しかったのでしょうか。それは、自分の子どもと、言語を通じてより深くコミュニケーションできるようになると考えたからではないのでしょうか。そして、自分の子どもが、「自分たちの社会」の一員になりつつあると感じたからではないのでしょうか。人間は母語を通じて、社会との最初関係を築きます。つまり母語は、ある人間が初めて覚えた言語というだけでなく、人間が社会の一員となるための基本的要素の一つなのです。

## 「母語」は「アイデンティティ」を形作ります

「アイデンティティ」とは、「自分が誰かということをも自分がどう理解しているか、そして、他の人がどう理解しているか」ということです。あなたは「自分が誰か」ということを、他人にどうやって説明しますか。身長や体重といった身体的特徴で説明しますか。でも、身長や体重は一生のうちに変わっていきますね。では、出身地で説明してみたらどうでしょうか。住む場所は変わっても、出身地が変わることはありませんから。でも、出身地が同じ人は他にもいるでしょう。出身地によって「あなたのアイデンティティ」の一部を説明することはできますが、「あなただけ」の説明にはならないかもしれません。それでは、「〇〇と××の一人目の息子」のような、家族との関係で説明するのはどうでしょうか。これなら「あなただけ」の説明になります。家族との関係から「あなただけのアイデンティティ」の基本的な部分を説明することができそうです。こうした関係は、ほとんどの場合は、物心つかない子どものうちから、親を通じて、母語によって教えられ、理解されてくるものです。つまり、あなたの「アイデンティティ」の基本的な部分は、母語によって築かれているのです。これはあまりに当然のことで普段は意識されることがありませんが重要なことです。特に母語が話されている社会から離れて暮らしている子どもにとって、とても大切なことなのです。

## 家庭では母語を大切にしてください

子どもが保育園や学校に行くようになると、友だちの影響が強くなるとともに、いろいろな場面で日本語を使うようになり、日本語が上手になっていきます。一方、母語を使う場はほとんどが家庭だけなので、母語の発達は限られてきます。日本の学校の先生のなかには、日本語の苦手な親に対して、「家庭でも日本語を使ってください」と求める人もいます。社会でも家庭でも母語にふれる機会が少ない子どもは、日本語をどんどん身につける反面、母語を使うこと、母語で育ったことを忘れていきます。コミュニケーションを主に日本語でするようになった子どもは、日本語が上手に話せない親とコミュニケーションをとることが、だんだん困難になっていきます。家族でありながら親と距離を感じるようになり、なかには、母国や親のルーツを否定したり、アイデンティティに悩む子どもも出てきます。

## さまざまな可能性がある「母語学習支援」

母語を使うための知識と機会を増やし、子どもが母語の力を伸ばすことを手助けすることを「母語学習支援」といいます。母語学習支援は、それを通じて、子どもが安定したアイデンティティを得ることを助けます。さらに、安定したアイデンティティによってもたらされる自己肯定感を足場として、子どものさまざまな能力を伸ばすことを目指します。実際に、母語の保持や学習に積極的に取り組んできた家庭で育った子どものなかには、母

国に戻った後で学校や社会への適応が容易であったり、日本での学習や進学、就職にプラスになったりしている子どもが多くいます。母語学習の最も重要な場はもちろん家庭ですが、家庭とコミュニティが共同した取組みも増えてきています。その多くは、「子どもの母語を大切に育てたい」という親の思いから始まっています。そのように始まったコミュニティの母語学習支援教室は、子どもだけではなく、親にとっても「つながりの場」「憩いの場」となり、コミュニティのエンパワーメントや活性化にもつながっています。

母語学習支援は、子どもにとって、家族にとって、コミュニティにとって、さまざまな可能性と実りを与えてくれます。あなたも、家族や仲間とともに、家庭やコミュニティで、母語学習支援に取り組んでみませんか。

(主執筆者：京都大学 准教授 塚原信行 氏)

## コラム

### 愛知県外国人コミュニティ母語教育等支援事業について

大島 ヴィルジニア ユミ (犬山市役所 多文化共生推進員)

私は日系ブラジル人三世で、来日してから今年で22年になります。私には日本生まれで日本育ちの、今年で19歳になる娘がいます。ブラジルで生まれ育った私にとっての母語はポルトガル語です。母語は、特に意識することなく自然に発することができる言語ですから、子どもとの会話の中心はポルトガル語でした。しかし、娘は日本で生まれ育ったため、ポルトガル語でコミュニケーションを図ることは容易ではありませんでした。

娘が年中の時、母語やバイリンガル教育について深く考える機会があり、日本にあるブラジル人を対象とした幼稚園と小学校に通わせることにしました。娘は通い始めた頃、母である私の母語を話す同級生や友人とコミュニケーションが上手く図れず、とても苦労していました。そして、娘が小学校4年生になった時、私たち家族は、日本に永住することを決め、これからも日本で暮らしていくためには、娘が日本の小学校で学ぶことが最良であると考え、転校させることを決断しました。

けれども、自分の母親の生まれ育った国の文化や言葉を尊敬し、私との“心の部分”のコミュニケーションを円滑にするためには、母語の勉強を続けさせるべきだと考え、周囲のブラジル人に声を掛け、数人の子どもたちを集め母語に関する勉強会を始めました。

当初は、私が住んでいる小牧市の県営住宅のアパートが会場で、とても熱心な講師を名古屋市からお招きし、毎週土曜日に開催していました。徐々に子どもの人数が増えたこともあり、小牧市のまなび創造館に会場を移し、一番多い時には、12人の子どもたちが母語の勉強をしていました。その後、別の講師を迎え、近くのキリスト教会に会場を移し勉強することになりました。新しい講師は、当時学校通訳をしており、ブラジル人が抱えるさ

さまざまな問題を少しでも解決したいと常々考え、日本の学校の勉強についていけない外国人の子どもたちを支援し、若者たちに「居場所」を提供するために熱心に活動を行っていました。

その「居場所」は、外国人の子どもたちにとってはリラックスして過ごせる場所でしたが、完全にボランティアベースの活動だったため、母語教育の指導には限界があると感じていました。私が知る限り、地域の母語教育はボランティアベースで、予算や活動資金がないまま続けているところがほとんどです。2008年のリーマンショック時は、日系人労働者たちの仕事が激減する中で、無料で勉強できる場所があることは子どもたちにとって、また、その親たちにとってもありがたいことだったと思います。

しかしながら、ボランティアベースで日本語教育や母語教育を行うことは本当に効果的なことなのでしょうか。実際、そのように感じている地域の外国人の親たちが、プロの母語教育の講師を探し、お金を出して塾のように通わせている人も少なくありません。多くの親は、子どもの教育に熱心だと思います。ところが、現実には、経済的な理由で子どもたちの教育環境に大きな差が生じ、それが、同じブラジル人やラテン人コミュニティの中の格差につながっており、いつか大きな問題につながるのではないかと憂慮しています。

全ての国籍の若い世代の教育を支援すること、そして日本語学習を支援することや母語教育を行うことは、将来の日本社会を背負っていく世代への投資であり、これは、我々外国人だけの問題ではありません。そして、学校だけの問題でもありません。行政や企業といったさまざまなセクターが協働し、社会全体で若い世代の教育を支援していくことが、日本に暮らす人たちの生活を支え、いつまでも安心して暮らせる社会につながるのではないのでしょうか。

# Ⅲ. 母語教室の取組みについて

本事業では、外国人県民が中心となって活動を行っている団体と協力し、県内 5ヶ所で母語教室を開催した。本章では、各教室の概要と開催内容について報告する。

## 1. 国際子ども学校

---

**実施期間：**平成 24 年 12 月 3 日（月）～平成 25 年 3 月 21 日（木）

（12 月度 40 分×21 回／1 月度 40 分×24 回／2 月度 40 分×28 回／3 月度 40 分×23 回）

**総時間数：**64 時間

**対象言語：**フィリピン語、英語

**実施場所：**愛知聖ルカセンター（尾張旭市）

**対象者：**フィリピンにルーツのある未就学児～小学生

**参加人数：**14 人

**授業料：**20,000 円/月（月～金 9:50～14:30）

**プロジェクトとしての支援内容：**物品提供、母語（フィリピン語、英語）指導者の雇用、教材作成

**使用教材：**

- ・フィリピン本国の学校で使用されている、フィリピン語の教科書を使用した。これらの教科書は、フィリピンの学校生活やライフスタイルをベースにしており、子どもたちの実状に適したものである。

**教室運営や授業内容において工夫した点：**

- ・教科書だけではなく、レッスンのトピックに出てきたものを説明するために、図表やポスター、インターネットなどを用いた。フィリピン語の授業だけではなく、社会や宗教等の科目においてもフィリピン語を使用した。また、フィリピン語の歌を歌うなど、幼い子どもたちが楽しく言葉を学べるように、授業内容を工夫した。

**教室運営や授業内容についての課題：**

- ・子どもたちは、それぞれ異なる事情や状況の中で暮らしている。いずれは日本の公立学校に入学する予定であるので、せっかく身につけたフィリピン語をいつまで保持できるか心配である。親が子どもの母語保持のために、日本で書籍や教材を手に入れることは簡単ではない。公立学校に通う子どもたちのための「フィリピン語教育プログラム」がないということが、国際子ども学校における、現在の大きな課題である。母語支援プログラムは、フィリピン語能力の保持はもちろんだが、子どもと親のアイデンティティを保つためにも重要であると考えている。

**指導者／コーディネーターより：**

・フィリピン人移住者とその子どもの状況はとても不安定であり、親は子どもの将来設計を、見通しを持ってしっかり立てることができない。親が日本に住んで、働いているからといって、子どもたちも同じように日本での生活を続けられるという保証はない。実際に、日本で働く親から離れ、フィリピンで生活しなければならないケースは数多くある。したがって、母語の保持はフィリピン人移住者の子どもにとって、これから待ち受ける将来のためにきわめて現実的に必要なのである。

**保護者／子どもの感想：**

・子どもたちのフィリピン語の上達に驚いた。子どもたちがフィリピン語を学んでくれたことで、自分たちの母語とする言語に、あらためて誇りを持つことができた。  
・子どもたちは、フィリピン語を理解できることに誇りを持つようになった。そして、学んだ言葉をみんなの前で披露する時には、特に嬉しそうだった。

**<ある日の教室の流れ>**

11:25~12:05 「読み」と「言葉」の構成について  
アルファベットを書く練習

(昼食)

13:05~13:45 物語「一人の子どもがいました」を読む  
語彙の勉強



教室の様子 1



教室の様子 2

## 2. フロンティアとよはし ポルトガル語・スペイン語教室

---

**実施期間**：平成 25 年 1 月 12 日（土）～平成 25 年 3 月 23 日（土）

（毎週土曜日 14:00～16:00）

**総時間数**：22 時間

**対象言語**：ポルトガル語、スペイン語

**実施場所**：県営岩田住宅（ポルトガル語）、豊橋市青少年センター（スペイン語）

**対象者**：ポルトガル語、スペイン語を母語とする小学生～中学生

**参加人数**：ポルトガル語 13 人、スペイン語 21 人

**授業料**：無料

**プロジェクトとしての支援内容**：教室の企画・運営（授業内容の計画及び授業の実施、子どもの出欠管理、保護者からの問い合わせ対応等）、物品提供、母語（ポルトガル語、スペイン語）指導者の雇用、教材作成

**使用教材**：

《ポルトガル語教室》

- ・ブラジルで使用されている教科書、アルファベットカード

《スペイン語教室》

- ・兵庫県国際交流協会発行のスペイン語教材、ペルーの幼稚園で使われているカルタ、ペルー本国の小学生向け指導書、手作りの教材等

**教室運営や授業内容において工夫した点**：

### ■教室運営

- ・外国人コミュニティから情報を得て、より多くの子どもが集まりそうな地域で教室を開催した。
- ・保護者やボランティアに授業のサポートを促した。
- ・保護者と密に連絡を取り合い、教室への参加を促した。

### ■授業内容

- ・ゲームや遊びを通じて、日常生活で使う単語を学習した。
- ・単語学習では、日本語での意味を同時に学習し、どちらの言葉も身につくようにした。
- ・レベルごとにグループを分けて、指導内容を工夫した。

**教室運営や授業内容についての課題**：

### ■教室運営

- ・土曜日の午後に開催したが、地域のサッカー教室の活動時間と重なってしまい、参加できない子どもがいたので、次回は開催時間に配慮したい。また、今回は 1 クラス内でグループを分けたが、次回はグループ毎の授業時間を設定し、一人一人に目が届くようにしたい。

**指導者／コーディネーターより**：

- ・親の言葉が理解できるようになったことで、親子のコミュニケーションが活発になり、以前と比べて家族がまとまってきたように感じる。

- ・あまり会話をしなかった親子が、母語教室に通うことでコミュニケーションをとるようになった。

**保護者／子どもの感想：**

- ・子どもたちが、母語を恥ずかしがらずに話すようになってくれて嬉しい。
- ・子どもが自分から母語教室に「行きたい」と言うようになった。
- ・子どもが自主的に勉強するようになった。親にわからない単語を聞くようになった。

**<ある日の教室の流れ（スペイン語教室）>**

14:00～16:00

**【グループ A】**

テーマ：母音（a,e,i,o,u）

- ・みんなで発音をしましょう！
- ・模造紙を使って書く練習をしましょう！
- ・母音を使った単語を覚えましょう！
- ・みんなで歌（母音を覚えるための歌）を歌いましょう！
- ・数字 1～10 を覚えましょう！

**【グループ B】**

テーマ：季節、曜日、時間

- ・曜日、月を発音してみましょう！
- ・曜日、月を読んで書いてみましょう！
- ・朝、昼、夜を発音してみましょう！
- ・朝、昼、夜を読んで書いてみましょう！
- ・春夏秋冬を発音してみましょう！
- ・春夏秋冬を読んで書いてみましょう！

宿題：カレンダーに 1～12 月をスペイン語で書きましょう！



ポルトガル語教室の様子



スペイン語教室の様子

### 3. 華豊の友

---

**実施期間**：平成 24 年 12 月 21 日（金）～平成 25 年 3 月 22 日（金）

（毎週金曜日 18:30～20:00）

**総時間数**：18 時間

**対象言語**：中国語

**実施場所**：豊田市国際交流協会（豊田産業文化センター3F）

**対象者**：中国にルーツのある小学生～中学生

**参加人数**：16 人（入門 6 人、初級 7 人、中級 3 人）

**授業料**：4,000 円/月

**プロジェクトとしての支援内容**：物品提供、母語（中国語）教室サポーターの雇用、入門クラスの教材作成

**使用教材**：中国領事館提供の教材

**教室運営や授業内容において工夫した点**：

■教室運営

- ・生徒の人数に変動があり、赤字のリスクが常にあるため、赤字にならないような仕組みづくりをしている。

■授業内容

- ・日本語が母語になっている子どもが多く、中国で使用されている子ども向け教材をそのまま使用するの難しい。基礎となる拼音（ピンイン）を教える教材がなく、指導者は授業の準備に苦慮している。今回の事業で作成した入門クラスの教材は、今後、中国語の基礎作りの授業において、大きな役割を果たすだろう。
- ・子どもなので、楽しく、退屈せずに授業を受けられるように、歌を導入するなど言葉への興味を引き出せるよう工夫した授業を行っている。また、ご褒美を与えるなど授業へのモチベーションを引き出すような工夫も行っている。

**教室運営や授業内容についての課題**：

■教室運営

- ・塾や部活のために教室を辞めていく子どもも多いので、定期的に生徒募集を行う。
- ・授業以外にも、夏季キャンプや短期留学、中国人学生との交流などを取り入れ、より幅広い活動を行っていきたい。

■授業内容

- ・学習目標を立てる。
- ・遊びながら言葉を身に付けられるような工夫をする。
- ・授業以外にも、言葉を活用したり、発表したりする場を作り、子どもたちが積極的に母語学習に取り組めるような工夫をする。

**保護者／子どもの感想**：

- ・言葉の学習の開始は、早ければ早いほど習得も早い。言葉の習得は日々の積み重ねなので、すぐに効果が出るものではないが、数年経つとその効果が明らかになる。私の子

どもは、5年近く、華豊の友の中国語教室で中国語を学んだ。はじめのうちは受け身だったが、徐々に主体的に取り組むようになった。この5年間の学習で、今後、独学するための基礎作りができたのではないかと感じている。

### <ある日の教室の流れ>

- 18:30～19:00 【歌】 イベントの出し物の歌の練習、歌詞の意味の勉強
- 19:00～19:50 【中国語初級】 発音（CDの復唱/ピンインカードの音読、歌と遊び）
- 【中国語中級】 教科書「うさぎとかめ」  
文章を作る練習、単語の書き換え練習、新出単語
- 【中国語上級】 教科書「頤和園」  
発音練習、文章説明、通訳練習



中国語初級クラス



中国語上級クラス



豊田市国際交流協会主催「中国デー」にて



春節祭での中国の歌の発表

#### 4. IPE QUINA (九番団地子どもポルトガル語・スペイン語教室「イペキーナ」)

**実施期間**：平成 25 年 1 月 23 日(水)～平成 25 年 3 月 23 日(土)

- ・ポルトガル語教室…16:00～17:00(水) 9 回、17:00～18:00(木・金) 18 回  
18:30～19:30(木・金) 18 回、10:00～11:00(土) 9 回
- ・スペイン語教室 …17:00～18:00(水) 9 回、10:00～11:00(土) 9 回

**総時間数**：ポルトガル語 54 時間、スペイン語 18 時間

**対象言語**：ポルトガル語、スペイン語

**実施場所**：名古屋市港区九番団地集会場

**対象者**：ポルトガル語、スペイン語を母語とする未就学児～中学生

**参加人数**：ポルトガル語 36 人

(内訳) 12～15 歳：6 人 (木・金 18：30～19：30)

8～11 歳：18 人 (木・金 17：00～18：00)

5～7 歳：12 人 (水 16：00～17：00、土 10：00～11：00)

スペイン語 8 人

(内訳) 4 歳～15 歳：8 人 (水 17：00～18：00、土 10：00～11：00)

**授業料**：無料

**プロジェクトとしての支援内容**：教室の企画・運営（授業内容の計画及び授業の実施、子どもの出欠管理、保護者からの問い合わせ対応等）、物品提供、母語（ポルトガル語、スペイン語）指導者の雇用、教材作成

**使用教材**：

《ポルトガル語教室》

- ・ブラジルの学校で使用している教科書、インターネット上の教材、手作りの教材

《スペイン語教室》

- ・ペルーで使用している教材、インターネット上の教材、手作りの教材

**教室運営や授業内容において工夫した点**：

《ポルトガル語教室》

- ・子どもたちと一緒にクラスのルールを考えた。そうすることで一人一人が教室の一員だと自覚することができた。
- ・母音をしっかり習得することで、その後のポルトガル語学習がうまくいくため、初めの 1 カ月は母音の習得を徹底した。
- ・子どもたちが楽しくポルトガル語を学べるように、たくさんの歌を一緒に歌った。
- ・子どもたちのポルトガル語のレベルが違うので、それぞれのレベルに合う教材を用意した。
- ・家庭で保護者と一緒に取り組める宿題を出した。
- ・ポルトガル語だけではなく、ブラジルの都市や文化、有名な物についても紹介した。

《スペイン語教室》

- ・授業が始まる前にスペイン語の音楽を流して、リラックスできるよう工夫した。

- ・子どもたちのレベルに合わせた教材を用意した。

#### 教室運営や授業内容についての課題：

##### 《ポルトガル語教室》

- ・自分の母国について何も知らない子どもが多いので、保護者は家庭の中でブラジルやポルトガル語について話して欲しい。保護者の母語に対する考えが、子どもの学習意欲に大きく影響する。
- ・ポルトガル語を話したいと思っている子どもたちがポルトガル語で話せる場所、話せる相手がいる環境が必要である。

##### 《スペイン語教室》

- ・スペイン語学習に前向きでなかった子どもが、保護者の後押しにより、最後まで休まずに参加した。母語学習にとって、保護者の協力はとても大切である。
- ・子どもたちのレベルはさまざまなので、一人で教えるのは難しい。子どもたちのレベルに合わせたクラス分けが必要である。

#### 指導者／コーディネーターより：

##### 《ポルトガル語指導者》

- ・教室が始まったときに、ポルトガル語をまったく理解できなかった子どもが3ヶ月で大きく成長した。これからもポルトガル語やブラジルについて興味を持ち続け、もっと自分の母国について知って欲しい。また、家庭の中や親子間で、母語でもっとコミュニケーションをとって欲しい。

##### 《スペイン語指導者》

- ・自分の国の文化や言葉を子どもに伝えたいならば、楽しみながら、子どもと母語で話をして欲しい。子どもたちは自分の母国について、もっと興味を持って欲しい。

#### 保護者／子どもの感想：

##### 《ポルトガル語教室の子どもより》

- ・交流会の時に、ポルトガル語で歌を歌ったことが楽しかった。
- ・毎回、教室に行くのが楽しみで、いつも教室が始まる何分も前に行っていた。教室が終わることと先生に会えなくなることが、とても悲しい。

##### 《スペイン語教室の保護者より》

- ・子どもがスペイン語を聞いて、理解できるようになってきた。
- ・教室が無くなってしまうので、今後の事が心配。
- ・これからも、もっとスペイン語を勉強してもらいたい。

#### <ある日の教室の流れ（ポルトガル語教室）>

16:00～	ポルトガル語で点呼
16:10～	ネームカードのデザイン
16:30～	みんなの前でポルトガル語で自己紹介
16:45～	ローマ字表を配布し、自分の名前に出てくるアルファベットを探す

<ある日の教室の流れ（スペイン語教室）>

- |        |                                 |
|--------|---------------------------------|
| 18:30～ | スペイン語の曲に合わせてストレッチ               |
| 18:35～ | スペイン語で名前の自己紹介                   |
| 18:50～ | 母音(大文字、小文字、筆記体大文字、筆記体小文字)の書き方練習 |



ポルトガル語で挨拶



スペイン語で自己紹介



ポルトガル語教室の様子



スペイン教室の様子

## 5. PECLA (豊川市国際交流協会ラテンアメリカ部会教育プログラム「ペクラ」)

**実施期間**：平成 25 年 1 月 12 日 (土) ～平成 25 年 3 月 16 日 (土)

(毎月第 1、2、3 土曜日 14:00～17:00)

**総時間数**：各言語 27 時間

**対象言語**：スペイン語、ポルトガル語

**実施場所**：豊川市社会福祉会館「ウィズ豊川」

**対象者**：スペイン語、ポルトガル語を母語とする小学生～中学生

**参加人数**：スペイン語 38 人、ポルトガル語 19 人

**授業料**：10,000 円/年。希望すれば、スペイン語、ポルトガル語、日本語及びダンス教室のすべてに参加することができる。

**プロジェクトとしての支援内容**：物品提供、母語 (スペイン語、ポルトガル語) 教室サポーターの雇用、教材作成

**使用教材**：スペイン語、ポルトガル語ともに本国から手に入れた教材

**教室運営や授業内容において工夫した点**：

### ■教室運営

- ・会費の 10,000 円だけでは運営が難しいので、バーベキュー大会などを開き、その収益を資金に充てている。

### ■授業内容

#### 《スペイン語教室》

- ・日本の学校でストレスを感じている子どもたちが、少しでもリラックスできるように心がけている。
- ・子どもたちとの対話を大事にしている。
- ・いろんな人が話すスペイン語を聞いて欲しいので、授業の中で 10 分ほどスペイン語のビデオ上映をしている。
- ・なぜ母語を勉強する必要があるのかを理解することが一番重要なので、その意義を伝えるようにしている。
- ・子どもたちに自信をもってもらうために、少しでも良いところがあれば褒めるようにしている。

#### 《ポルトガル語教室》

- ・文字の書き順、アクセント、コンマ等は大事なので丁寧に教えている。
- ・単語の意味を一つ一つ丁寧に教え、その単語を使って文を作らせる。
- ・文章を音節にわけて説明している。
- ・学習した単語を繰り返し復習して覚えさせている。
- ・ブラジルの都市や記念日、文化等についても教えている。

**教室運営や授業内容についての課題**：

#### 《スペイン語教室》

・ほとんどの子どもたちは、日本語もスペイン語も中途半端であるが、本人も親もそれに気づいていないことが多い。また、子どもたちは「自分はスペイン語ができるから習わなくても大丈夫だ」と思っているが、レベル的にはペルーに住んでいる子どもたちに比べるとかなり劣っている。彼らには、ペルーに住んでいる子どもと同様の授業方式でなく、語学学校で外国人に教える要領で授業を行う必要がある。

《ポルトガル語教室》

・ほとんどの子どもたちは、発音が日本語化している。特にLとRの区別が出来ない。語彙も乏しい。そのため、発音を矯正したり、学習した語彙が定着するよう、何度も復習するといった工夫をしている。

**指導者／コーディネーターより：**

《スペイン語指導者》

・ほとんどの親は日本語があまり得意ではない。親が意思を正確に伝えることができる言葉はスペイン語なので、子どもにもスペイン語を身につけてもらい、親子のコミュニケーションがうまく取れるよう、手助けをしていきたい。

《ポルトガル語講師》

・子どもたちが日本語に慣れてしまい、ポルトガル語の習得が難しくなっている。週に一度の勉強では少ないので、家庭でもポルトガル語を多く使って会話をして欲しい。

**保護者／子どもの感想：**

《スペイン語教室の子どもより》

・授業はとても工夫されていると思う。楽しい。

《ポルトガル語教室の子どもより》

- ・授業はとても楽しい。
- ・教室のおかげで、ポルトガル語の文字が書けるようになった。
- ・ブラジルの文化をたくさん学びたい。

**<ある日の教室の流れ（スペイン語教室）>**

14:00～15:00	スペイン語上級
冠詞の使い方、1年の月・1週間の曜日・1年の季節、「DE, EN, EL, LA」の使い方 ビデオ鑑賞「地球温暖化」	
15:00～16:00	スペイン語初級
P の読み書き、宿題：m と p を使った単語の練習 ビデオ鑑賞「アルファベット」	
16:00～17:00	スペイン語中級
1 から 100 までの数字の書き取り、P を使った単語の書き取り ビデオ鑑賞「キツネとカラス」	

<ある日の教室の流れ（ポルトガル語教室）>

14:00～15:00 ポルトガル語中級

読みと書きの練習、文章の解釈、ta, te, ti, to, tu / ar, er, ir, or, ur の使い方

15:00～16:00 ポルトガル語上級

x, f を使ったことわざ、音節の分け方、文節の使い方、自分の名前の書き方

16:00～17:00 ポルトガル語初級

直線と曲線、まとまりと同じ要素、ペアであるものについての勉強、色



スペイン語教室 中級



スペイン語教室 上級



ポルトガル語教室 上級



クリスマス会で発表

# IV. 母語教育サポートブックについて

## 1. 名称

母語教育サポートブック『KOTOBA』—家庭/コミュニティで育てる子どもの母語—

## 2. 目的

本冊子は、外国につながる子どもの保護者や支援者に向けての母語教育の啓発と教室運営のノウハウを伝えることを目的に作成した。各家庭や地域において、母語に対する意識を高め、外国人当事者による母語教育実践へとアプローチするため、母語の重要性をわかりやすく説明した。また、愛知県内の母語教育実践事例や家庭で母語教育に取り組んでいる保護者の実践事例等も掲載した。本冊子をきっかけに、保護者や支援者が子どもの母語について関心をもち、事例を参考にして、家庭や地域でどのように母語教育に取り組めばよいのかを考えてもらうことができると考えている。

## 3. 構成

### (1) 「母語は大切です」:

外国につながる子どもの保護者や支援者が母語教育に関心をもってもらえるよう、母語の重要性についてわかりやすく説明した。

### (2) 愛知県に住んでいる外国人のお父さん、お母さんに聞きました

#### 「子どもの母語を育てるために、家庭でこんなことをしています」:

愛知県内に居住している、外国人の保護者 50 名に聞き取り調査を行い、その結果を親の出身国ごとにまとめた。聞き取り調査は、冊子作成検討委員会の母語教室 5 団体に通う保護者のみなさまにご協力いただいた。

### (3) 探してみよう 行ってみよう 子どもの母語教室:

愛知県内で母語教室を開催している団体及び母語で学習ができる団体(学校)を一覧表にまとめた(平成 25 年 3 月現在)。また、それらの団体の所在地を愛知県の地図上に示した。母語教育実施団体の調査には、公益財団法人 愛知県国際交流協会をはじめ、愛知県内すべての国際交流協会のみなさまにご協力いただいた。さらに、具体的な実践事例として、5 言語 7 団体の活動を採り上げた。事例団体は、検討委員会の母語教室 5 団体と特定非営利活動法人コリアンネットあいち、特定非営利活動法人 ABT 豊橋ブラジル協会のみなさまにご協力いただいた。

### (4) 母語教室をつくってみませんか:

本章では、母語教室の運営ノウハウを Q&A の形式で示した。問いと答えについては、検討委員会の母語教室 5 団体の意見を参考にした。

#### 4. 仕様

日本工業規格 B5 判 中綴じ 28 ページ カラー刷り

#### 5. 作成言語

ポルトガル語、スペイン語、フィリピン語、中国語、韓国朝鮮語 ※日本語併記

#### 6. 作成部数

(ポルトガル語) 4,000 部

(スペイン語、フィリピン語、中国語、韓国朝鮮語) 各 2,000 部

#### 7. 作成検討委員会について

有識者を含めた以下の 19 名、5 団体によって構成された、「母語教育サポートブック」作成検討委員会による検討会議にて、冊子の対象者、コンセプト、構成、内容等について話し合った。検討会議は、平成 24 年 12 月 28 日(金)と平成 25 年 1 月 27 日(日)に開催した。

### ■ 母語教育サポートブック作成検討委員

#### (1) 有識者 (敬称略・五十音順)

氏名	所属
伊東 浄江	特定非営利活動法人 トルシーダ 代表
大島 ヴィルジニア ユミ	犬山市役所 多文化共生推進員
沖 久美子	公益財団法人 名古屋国際センター 広報情報課
金 順愛	特定非営利活動法人 コリアンネットあいち 事務局長
栗木 梨衣	公益財団法人 愛知県国際交流協会 交流共生課課長
小島 祥美	愛知淑徳大学 准教授
サラ リディア	愛知県立大学 准教授
塚原 信行	京都大学 准教授
松本 一子	愛知教育大学・愛知淑徳大学 講師
三上 憲一	株式会社 三恵コンサルティング 代表取締役
リアン テルミ ハタノ	近畿大学 准教授

#### (2) 母語教室 (順不同)

言語 (地域)	団体名
中国語(豊田市)	華豊の友
ポルトガル語・スペイン語(名古屋市)	九番団地子どもポルトガル語・スペイン語教室 IPE QUINA イペキーナ
フィリピン語(尾張旭市)	国際子ども学校
ポルトガル語・スペイン語(豊橋市)	特定非営利活動法人 フロンティアとよはし
ポルトガル語・スペイン語(豊川市)	豊川市国際交流協会ラテンアメリカ部会 教育プログラム PECLA

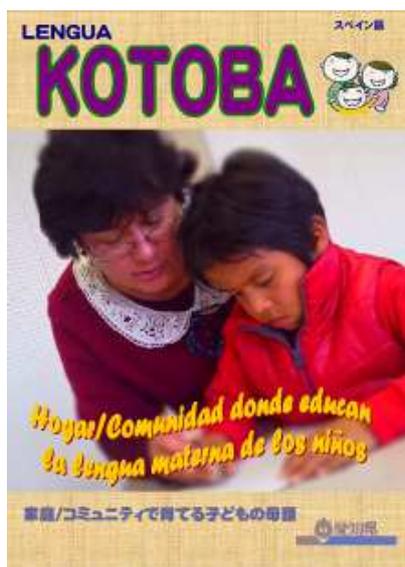
(3) 編集者 (順不同・敬称略)

氏名	所属
川口 祐有子	愛知 外国につながる子どもの母語支援プロジェクト (NPO まなびや@KYUBAN)
河村 槇子	愛知 外国につながる子どもの母語支援プロジェクト (特定非営利活動法人 多文化共生リソースセンター東海)
堀江 結	愛知 外国につながる子どもの母語支援プロジェクト (特定非営利活動法人 多文化共生リソースセンター東海)
松田 薫	愛知 外国につながる子どもの母語支援プロジェクト (特定非営利活動法人 多文化共生リソースセンター東海)

稲波 智子	愛知県 地域振興部 国際課 多文化共生推進室 室長補佐
大橋 充人	愛知県 地域振興部 国際課 多文化共生推進室 主任主査
小笠原 美保子	愛知県 地域振興部 国際課 多文化共生推進室 主査
永田 澄子	愛知県 地域振興部 国際課 多文化共生推進室 主任

■ 翻訳担当者 (順不同・敬称略)

言語	氏名
中国語	松田 薫 (愛知 外国につながる子どもの母語支援プロジェクト)
ポルトガル語	木村 玉美
フィリピン語	矢元 貴美 (大阪大学大学院 人間科学研究科 博士後期過程)
スペイン語	金箱 亜季 (株式会社 三恵コンサルティング)
韓国朝鮮語	李 正光 (特定非営利活動法人 コリアンネットあいち)



スペイン語版



フィリピン語版

# V. 母語教育に関する学習会について

- 実施日時：平成 25 年 2 月 24 日(日)13：30～16：30
- 講師：特定非営利活動法人 コリアンネットあいち 金順愛氏  
特定非営利活動法人 ABT 豊橋ブラジル協会 大河幸代氏 稲垣和栄氏
- 参加者：33 人(うち関係者 10 人)

## ■ テーマ

「オールドカマー、ニューカマー、それぞれの保護者らによる母語教育実践報告会  
～こどもに伝える わたしの言葉～」

## ■ タイムスケジュール

- 13：30 開会のあいさつ
- 13：40～14：20 特定非営利活動法人 コリアンネットあいち 金氏の報告
- 14：20～15：00 特定非営利活動法人 ABT 豊橋ブラジル協会 大河氏、稲垣氏の報告
- 15：00～15：05 休憩
- 15：05～16：30 ディスカッション・交流会
- 16：30 閉会のあいさつ

## 【報告 1】 特定非営利活動法人 コリアンネットあいち (金 順愛氏)

コリアンネットあいちは、在日コリアン 1 世の介護保険事業を主な活動とし、定款において子育て支援や障害者の自立支援、国際交流も掲げている。名古屋市社会福祉協議会の推薦を受けて WAM NET (独立行政法人福祉医療機構) の助成金を獲得し、「KOREA 子どもたちの遊びの広場」という、日本の学校に通う在日コリアンの子どもたちとその友人を対象にした遊びの活動の中で、ハングルノリマダン(母語の遊び)とミンソンノリマダン(民族遊び)の 2 つの柱を通して、子どもたちの母語支援を行ってきた。しかし、明確には母語支援を主に置かず、民族に対して誇りを持てるように、自分のルーツを知った時に喜べるように、という思いから活動を行ってきた。

### ～KOREA 子どもたちの遊びの広場の活動～

日本の学校に通うオールドカマーの子どもたちは、すでに 4 世、5 世で、「帰化」して自己のルーツさえ知らない子どもが多く、母語の大切さを知ってもらうところまで行きつかない。そのような現状の中で母語学習が「勉強」となってしまったら、子どもたちはよりハングルを遠ざけてしまうのではないかという危惧から、ハングルを身近に感じてもらうための活動を考えた。

◇ハングルノリマダン(母語遊び)

- ・クイズ(日本語と朝鮮語の違うものや同じもの)
- ・カルタ(民族衣装や食べ物)
- ・習字(ハングルの書き方)
- ・地図パズル
- ・単語の暗記(誰が先に覚えられるかな)
- ・朝鮮半島の民話や昔話の絵本・紙芝居

◇ミンソンノリマダン(民族遊び)

- ・コリアンの名節を学ぶ(風習、遊び、料理や踊りなど)
- ・アリランのダンス(ポップ調にしてアレンジ)
- ・チャンゴ作り
- ・タルー仮面作り
- ・粘土工作(高句麗の時代の遺品の写真を見て)
- ・サンモ体験(助成金でサンモを購入、ノリパンや歌劇団のプロが指導してくれた)
- ・トーテンポール(三重の朝鮮学校の先生が木材を提供してくれた)
- ・コリア式相撲
- ・ユンノリ[すごろく]
- ・ノルティギ[シーソー](助成金で購入、韓国から取り寄せた。昔ほどの朝鮮学校にもあったが、危ないとのことでなくなった)
- ・ペンイ[コマ](叩きながら回し、戦わせる)

◇おやつ作り

- ・タグア[きな粉とはちみつを混ぜて形作ったもの]
- ・チヂミ
- ・キンパ[海苔巻]
- ・オンマそうめん[そうめんに冷麺の素材を入れたもの]
- ・パッピンス[かき氷]
- ・ファチェ[フルーツポンチ]

◇フェスタ ※毎年3月、日本社会で活躍している在日コリアンの専門家を招いて開催。

- ・ハングルでスピーチ
- ・DNA探し
- ・昆虫のクイズ
- ・チョゴリ試着体験と民族衣装クイズ
- ・カヤグム[伝統弦楽器]体験

○活動を通して気づいたこと

遊びの広場に通う子どもたちが、1世の伝統文化を知らないということがショックであった。また、活動を通して、日本人の役割がとても大きいことがわかった。活動では日本人の子どもが率先してチマチョゴリの試着をし、在日の子たちを後押ししてくれたり、韓国

のおやつ作りをリードしてくれたりした。そして、在日の子を探して集めるより、在日コリアンのルーツを持った人が生活している、日本の学校や日本社会に向けて情報を発信していくことが大切であり、また、日本人も情報も発信してくれることがわかった。

#### ○コリアンネットあいちの子育て支援とは

自己のルーツを知り、誇りを持ちながら暮らせるお手伝いをする事。

#### ○在日コリアンの抱える問題

コリアンとしての誇りが持てない子どもたちは、「日本人になりたい」という問題にぶつかりがちである。また、歴史的背景や日本の同化政策の影響で帰化人が多い。それは朝鮮民族への蔑視につながっており、自己のルーツを探しづらい状況を生みだしている。「母語教育＝自民族への矜持を抱くということ」を明確にすることが大切ではないだろうか。

#### ○在日コリアンとニューカマーを考えた時に

外国人施策は、日本社会に馴染めるように日本語教育に力を注いできたが、それによって「日本人になりたい」という思いを強くする子どもたちが増えたのではないだろうか。まずは、自分が何者なのかを考えることにつながる母語教育が大切である。そして、自分の歴史を知るということでは、オールドカマーもニューカマーも同じではないだろうか。

#### ○母語教育支援へのさまざまな努力

「在日コリアンのための教材(ペンを当てると韓国語・日本語・英語で発音する)を開発したが、本当に使ってもらいたい子どもにも普及していない」と嘆く同胞業者がいる。教材と製作者の思いが、この母語支援プロジェクトで活かされると良いと思う。

#### ○朝鮮学校のこと

朝鮮学校の卒業生は10万人にも及ぶ。県内にも5箇所の朝鮮学校があるが、現在はかなり縮小されてきている。校舎の耐震不安、教師への給与の滞りや生徒の月謝支払いの滞り、自治体からの補助金打ち切りや高校の「授業料無償化」からの朝鮮学校排除など、さまざまな問題を抱えている。教師は民族学校を守りたいという気持ちで日々を過ごしている。

#### ○幼児期の母語教育

片言でも良いので、母語に接することや食文化・衣文化との関わりを持つ事が大切だ。

#### ○保育園などの役割

みんな同じという考えではなく、保育士の多文化共生の意識を高めることが必要。今後、保育園と、母語教育のグループやNPOが力を合わせて、何か活動ができると良いと思う。

#### ○愛知県の多文化共生推進プランについて

名古屋から発信するこの母語プロジェクトの取組みや多文化共生推進プランは、全国的にも斬新な動きで、素晴らしいことだと思うが、政治的な問題を乗り越えられるか不安である。しかし、川口氏や多文化共生リソースセンター東海の呼びかけがとても勇気になる。

### **【報告2】特定非営利活動法人 ABT 豊橋ブラジル協会（大河幸代氏 稲垣和栄氏）**

本団体は、ブラジル人自らの自助組織として平成16年9月26日に設立され、平成20年6月に法人化した。当初の事務局は、現在の豊橋市文化市民部多文化共生・国際課内にあった。母語教室を始めたきっかけは、親子でコミュニケーションを取りづらくなるほどの、ブラジル人の子どもの「日本人化」が顕著になったからである。保護者らは、親子のコミュニケーションが困難になることを心配し、「自分の子どもにポルトガル語を学ばせたい」という思いが強くなった。在日ブラジル人学校に通わせるには、経済的に厳しい家庭が多く、「リーズナブルな金額でポルトガル語を教えてくれる教室を」という要望に応えるため、平成19年より、子どもを対象にしたポルトガル語教室を開始した。

#### ○協会の課題（大河氏）

一時的な助成金に頼って安定した教室を長く続けることは難しいので、保護者に授業料を払ってもらい、ポルトガル語教室を継続してきた。しかし、不況の影響で授業料が払えなくなった家庭が増え、生徒が辞めていき、運営が難しくなっている。しかし、保護者の負担には限度があり、授業料の値上げは望ましくない。母語教室は継続してこそ意味がある。安定した運営の中で、子どもたちに充実した内容の授業を受けさせたいと考えているが、現実には厳しく、教室の維持費、講師への謝金等の運営費の捻出が一番の悩みである。周囲からは、本団体は市役所の中に作られた団体なので、財政的に余裕があると思われており、授業料に頼らざるを得ない運営をなかなか理解してもらえない。豊橋市内のブラジル人は減少傾向にはあるが、現在も7,500人以上おり、相談を受ける案件や支援しなければいけないことが数多くある。なかでも、日本の教育もブラジルの教育も受けておらず、日本語もポルトガル語も十分に話せず、家に引きこもった状態の義務教育年齢以上の子どもが何人もいる。本団体だけではなかなか支援の手が回らず、歯がゆい思いをしている。

#### ○子どもたちの迎え方（稲垣氏）

ブラジル式の挨拶である「ハグ」で子どもを迎える。日本に暮らしているとスキンシップが少ないので、日本で育った子どもたちはブラジル式のスキンシップに慣れていないが、少しでもブラジルを感じてもらいたいと思ってやっている。1ヶ月も経つと、子どものほうからスキンシップをしてくるようになる。

#### ○教育オリエンテーション（稲垣氏）

ブラジル本国の学校には、教育オリエンテーションを担当する職員がいる。私は小学校1年生の時にポルトガル語の能力が低かったため、成績が悪かったのだが、日系ブラジル人2世で日本語ができる教育オリエンテーション担当者が、両親を学校に呼び、ブラジルの学校の落第制度を説明してくれて、「もう一度1年生の内容を学習して、ポルトガル語の力をつけませんか」と言ってくれた。それで私は1年生をもう一度やり直し、自信をつけた。そこで自信をつけたことは、その後の学力にも大きく影響した。

#### ○ポルトガル語教室コーディネーターとして（稲垣氏）

私は、コーディネーターは「人と人をつなげること」だと考えている。コーディネーターは学習面だけではなく、子ども、保護者、指導者の気持ちもサポートしなければならない。例えば、子どもが母語を学習する意欲がないのに、保護者が母語教室に通うことを無理強いするケースがあるが、私は事前に、必ず、親子で面接するようにしており、その家庭の環境を把握して親子それぞれの思いを調整するようにしている。また、指導者と保護者をつなげることや、子どもの心のサポート、家庭生活のサポート等さまざまな仕事を担っている。

#### ○コーディネーターに必要な力（稲垣氏）

みんなの意見を聞いて、まとめて、マネジメントする「コミュニケーション力」と、一歩下がって考え、上手く行くためには何が良いかを冷静に考える「分析力」が必要。

#### ○見えてきた課題（大河氏、稲垣氏）

##### ・地域との関わり

さまざまな地域の子どもが通ってきているため、なかなか地域と連携できない。

##### ・教材

ブラジルから教科書を輸入しているが、日本育ちの子どもたちは語彙が少なく、教科書の言葉が理解できない。また、日本で作られた教材は、日本の考え方で作成されているため、教材として使えない。日本で育った子どもに合った教材をぜひ作って欲しい。また、母語教室の指導者が、地域を越えて交流や情報交換できる場を作って欲しい。

### **【ディスカッション】 幼児期の母語の大切さを保護者に伝えるには**

---

（司会進行：愛知 外国につながる子どもの母語支援プロジェクト 川口祐有子）

稲垣氏：親に対して、子どもへの母語教育を無理強いする必要はない。それぞれの家庭には、それぞれの事情や将来設計がある。支援者は、親が自ら「母語を教えたい」「伝えたい」という思いが生まれるような働きかけをすることが重要だ。また、「母語を大切にし

たい」と考えている親に伝えたいのは、子どもは一番身近にいる親の背中を見て育つのであるから、家庭内で積極的に母語や母国の料理、伝統行事などの文化を伝える姿勢を見せて欲しいということ。私たちは、親の思いを尊重しながら、親と一緒に子どもの母語をサポートしていきたいと考えている。

参加者：私の両親はフィリピン人で、親は、「日本にいたのであれば日本語を話さない、日本に同化するほうが日本で生きていくためには楽」という考えだった。現在、自分の母語も日本語も上手に話すことのできない子どもが増えている。私の親のように、親が「母語を勉強しなくても良い」という考えを持っているのであれば、それを他者が覆すことは難しい。しかし、日本語しか話せない子どもと、片言の日本語しか話せない親では、親子で意思疎通ができない。それが問題だ。また、知り合いの日本語教師は宿題を出す時に、「母語は何というのか親に聞いてきなさい」と子どもに指導している。子どもと親が自然に母語に触れることができるようにと考えているからだそうだ。そのように、私たちは、子どもが母語に対して興味を持つきっかけを作ることができる。親へ直接アプローチするよりも、子どもにアプローチして親につながるほうがアプローチしやすい。

川口：母語教育に熱心な家庭の子どもの中には、「お父さん、お母さんの国が好きだから、いつか行きたいんだ」と自ら積極的に母語を勉強する子どもがいる。そういったモチベーションがある子は楽しく学習に取り組んでいる。親や周囲に言われて、無理やり勉強させられるのは楽しくなく、将来、その言葉を使おうとは思わないのでは。今の発言にあったように、アプローチの仕方は多様に考えていかなければならない。

金氏：オールドカマーは世代が代わってきている。民族教育を受けなかった2世の人の多くは、韓国朝鮮語を理解できるが話すことができない。話せないことに劣等感を感じている人もいる。話せないが「在日だということが恥ずかしい」部分と、「開き直り」の部分があり、価値観が多様化している。できれば、親から子へ母語を継承してもらいたいが、現在の在日コリアンの中には、親が韓国朝鮮語を話せないという人が多い。まず、環境づくりが大切なのではないか。外国につながる子どもには母語が大切だということを、日本社会や地域に向けて発信していくことが必要だ。そうすれば、母語支援を必要とする人へ情報やメッセージが届くようになるのではないか。

川口：家庭内の取組みだけではなく、「ポルトガル語話せるってすごい、フィリピン語ってカッコいい」と日本社会全体がなれば、子ども自身の「学びたい、伝えたい」につながるのではないか。その人の背景にある文化や母語を尊重できる社会になるように、私たちは活動していく必要がある。

稲垣氏：私も、異文化の考え方を学び、尊重することで、人間は育つのではないかと思う。

川口：ディスカッションのテーマである、「幼児期の母語の大切さを保護者に伝えるには」について講師に伺いたい。母語に無関心な家庭は、子どもの教育に熱心ではないと捉えがちだが、どうか。

大河氏：家庭によって考え方や事情が違うので、まずは家庭の考え方を尊重すべきだと思う。帰国予定がある家庭は、帰国後の生活を考えて母語教育に力を入れる。しかし、そのように予定がはっきり決まっていなく、日本での生活が長い子どもは、母語の学習を拒否する傾向がある。母語を学ばせたい親は、それを悲しいと感じているが、子どもは「これからも日本で生きていくから、ポルトガル語は必要ない」と考えている。

川口：まとめさせていただくと、保護者や子どもと信頼関係を築き、それぞれの思いに寄り添いながら必要な支援をしていくことが大切であり、支援者の思いを押し付けてはいけないということだろうか。母語を学びたい子どもたちを応援する仕組みづくり、母語を支援したいという人を応援する仕組みづくりを目指して、母語支援プロジェクトは今後も活動を続けていきたい。

### **【参加者の感想】 ※ 参加者に一人ずつ感想を述べていただいた。**

---

・講師の話しを伺って、子どもたちが自分の国に誇りを持つようになって欲しいと思った。現在、私は、ペルー出身の子どもたちに学習支援を行っている。子どもたちに「スペイン語を教える」というと喜んで教えてくれる。(日本人、学習支援ボランティア)

・以前、オーストラリアで日本文化を伝える活動に参加した時、オーストラリアには移民が多いことを知ったのだが、移民の彼らが祖国の文化を維持し、継承していくのは大変な苦勞があることを学んだ。今日の話聞いて、あらためて、母語を大切にしながら日本語を勉強することはとても大変だと思った。(日本人、日本語・学習支援ボランティア)

・私は12歳の時にペルーから来日し、日本の学校に通った。いろいろな悩みを抱えていた時期もあったが、現在、スペイン語を母語とする子どもたちに、スペイン語を教えるという貴重な経験をさせてもらっている。私の教室の子どもたちは、両親をとっても大切にしており、親の考えを尊重している。親子の良好な関係を築くために、自分に何ができるかということについていつも考えている。(ペルー人、スペイン語教室指導員)

・自分は幼稚園児の時に、家庭で食べている物が日本人の子と違うことに気付いた。自分の国籍を親に聞いたこともあった。小学生の時から在日コリアンであることを告白するのが嫌で、「日本人になりたい」といつも思っていた。父親は私を朝鮮学校に通わせたいという思いがあったのかもしれないが、私は自分の意思で日本の学校を選択した。そういった

自分の経験があるので、自分の子どもに祖国のことを伝えたり、家族で話題にしたりするときには、いろいろと考えてしまう。(在日コリアン3世)

・私の夫はフィリピン人で、子どもは日本語しか話せない。そのため、父親と子どもが円滑にコミュニケーションをとれないという問題に直面している。しかし、子どもにフィリピン語を身につけることを無理強いするつもりはなく、夫と子ども、双方の歩み寄りを見守っている。また、私は支援者でもあるので、支援の場では、保護者や子どものニーズに寄り添い、そのニーズに合った支援ができるよう知識を増やしてしていきたい。(日本人、夫フィリピン人、外国人相談員)

・ブラジルに日本語教師として派遣された時に、日本の学校に5年生まで通ったというダブルリミテッドの子どもと出会い、その時の経験がもとで教員免許を取得した。現在は、講師をしながら、知立市で放課後学習支援の活動に関わっている。これからの日本社会が、子どもたちがスムーズにアイデンティティを確立できるような社会になって欲しい。また、子どもが母語を学びたいと思った時に、自由に学べるような環境を作っていきたい。(日本人、夫ブラジル人、学習支援ボランティア)

・私の子どもは中国で生まれ、保育園の年中まで中国で暮らしていた。その後、来日し、現在は日本語しか話せなくなってしまった。中国語を忘れてしまったことを残念だと思うが、今は中国語を押し付けるのではなく、普段からさりげなく中国語で会話するようにしている。まず、「子どもをどう育てたいか」という保護者の考えが大切だ。(中国人、中国語教室指導員)

・週1回、子どもを対象にした中国語教室を開催している。子どもたちが中国語を学ぶ環境が身近にないことが課題で、まずそういった環境づくりが大切だ。社会で認められるという外的環境、家庭内で認められるという内的環境の双方の支援が必要であると思う。私の家庭では中国語で会話し、中国文化を家庭の中心において生活してきたため、子どもの中国人としてのアイデンティティは安定しているのではと感じる。日本語が習得しにくくなるのではとか、学校でいじめられるのではと心配せず、幼い時は家庭の中で母語を徹底することが大切だと経験から学んだ。(中国人、中国語教室指導員)

・子どもたちが置かれているさまざまな環境に柔軟に対応していくことが大切だ。子どもたちが自由に自分を表現できるようになれば良い。(日本人、学生、群馬県の母語保持教室ボランティア)

・大学で日本語教育を専攻した。現在も外国につながる子どもの支援をしており、現在も家庭内でコミュニケーションをとれないという親子を目の当たりにしている。そういった親子の関係を改善するために、自分に何ができるかをこれからも考えていきたい。(日本人、

群馬県の母語保持教室ボランティア)

・17歳で中国から帰国し、中国帰国者の支援活動に20年以上関わってきた。私の親は日本人である。自分は思春期の時に「何人として生きていこうか」と悩み、日本に帰国して「日本人として生きていこう、日本人と同じになろう」と決めた。中国人と見られることに、とても疲れていたからだ。しかし、あるきっかけで「日本人になろう」とすることを止めた時に、気持ちがとても楽になった。今は、日本人としての良いところ、中国人としての良いところを上手に使いわけて暮らしている。今日の話聞いて、支援者と支援される側の思いが異なることがあることを学んだ。支援者は、支援される側がその支援を本当に必要としているのか、立ち止まって考えることが必要だ。(中国帰国者2世)

・現在、私が関わっているフィリピンの子どもたちは、ときどき、親の日本語通訳をすることがある。そういった子どもたちは、日本語が話せない親のことを軽視しており、また、親の文化を軽視している。それを私はとても問題だと思う。今日の話聞いて、いろいろな方がさまざまな形で子どもたちと関わっていることを知った。(日本人、日本語ボランティア)

・今日の会では環境づくりの大切さを学んだ。しかし、このように日本人が一所懸命取り組みを行っていても、外国人には伝わっていない。取り組みや情報を発信し、共有できる場をこれから作っていかねばいけないと思った。(日本人、日本語ボランティア)

・私の夫は外国人で、親子のコミュニケーションの難しさを、身をもって体験している。母語教室がそういった悩みを持つ保護者同士の相談の場になれば良い。(日本人、夫スペイン人)

・どのクラスにも外国籍の子が在籍する、ある学校では、校長室の前の廊下に生徒の出身国の挨拶の言葉が掲示されており、1月の始業式では、校長先生自ら、各言語で新年の挨拶をする。この学校では職員や生徒が外国につながる子どもを認め、彼らの持つ文化を尊重している。このように学校ぐるみで、子どもの母語や子どもの背景にある文化を尊重する学校環境を作ることが大切だと思った。(日本人、教員)

・子どもの家庭環境は、母語の保持や学習に大きな影響を与える。例を挙げると、父親が日本人、母親がフィリピン人の生徒は、家庭内でフィリピン語を話すことを禁じられている。また、母語が幼児期に確立されている子どもは、日本語の習得も早い。私は授業の中で、彼らに出身国のことを聞いたり、自分で調べたりして、生徒と出身国のつながりを大切にするようにしている。(日本人、教員)

・子どもたちが母語を失うことが一番の心配だ。自分の経験を紹介すると、娘と息子が来

日したばかりのとき、彼らは日本語で挨拶することもできなかったが、努力をして母語であるスペイン語を保持し、日本語も習得した。今、息子は日本の大学を卒業して、ペルーで働いている。しかし残念ながら、孫は日本語しか話せない。私は孫とおしゃべりしたくても、それは難しく、寂しい思いをしている。日本の学校に通っている子どもは、学校にいる時間が長いので日本語が優位に身につけてしまう。そのため、家庭では母語を教える機会を作ったほうが良いと思う。(ペルー人、スペイン語教室指導員)

・「あいち多文化共生推進プラン」では、母語教育の重要性について明記している。今後も、外国人コミュニティによる母語学習支援が促進されるよう、取り組んでいきたい。(愛知県国際課多文化共生推進室)

・多様な価値観やアイデンティティを持つ人が集い、自分の母語や子どもの母語に対する思いを伝え合ったのは初めて。今後もこのような場を継続して作っていきたい。(川口)



(特活) コリアンネットあいち  
金氏の報告



(特活) ABT 豊橋ブラジル協会  
大河氏の報告



(特活) ABT 豊橋ブラジル協会  
稲垣氏の報告



白熱したディスカッションの様子

# VI. 母語教室交流会について

母語教室で学んだ子どもたちの学習成果発表の場、子どもや保護者、支援者が交流する場、母語教育に関心のある人が、理解を深め、子どもや支援者と交流する場を作ることを目的として、下記の通り「母語教室交流会」を開催した。なお、子どもたちの学習成果発表の主題は「ぼくの国、わたしの国」とした。

## 1. 開催概要

---

日 時：平成25年3月3日（日）13:30～16:30

場 所：豊田産業文化センター 4階大広間（豊田市）

参加団体：IPE QUINA（九番団地子どもポルトガル語・スペイン語教室「イペキーナ」）

PECLA（豊川市国際交流協会ラテンアメリカ部会 教育プログラム「ペクラ」）

華豊の友

国際子ども学校

フロンティアとよはし

参加者数：約180名

内 容：

【1】発表会：主題「ぼくの国、わたしの国」に沿い、歌や踊り、朗読、演劇等で母国について紹介した。（各団体15分以内）

【2】交流会：ブラジル、ペルー、フィリピン、中国、日本のお菓子を用意し、自由に交流をした。

## 2. 発表内容（発表順）

---

① フロンティアとよはし（スペイン語教室のみ）

- ・アルファベットの歌
- ・ペルーの歌

② IPE QUINA（九番団地子どもポルトガル語・スペイン語教室「イペキーナ」）

- ・アルファベットの歌（ポルトガル語教室）
- ・歌「わたしはなりたい」（ポルトガル語教室、スペイン語教室 合同発表）

③ 華豊の友

- ・中国民謡

④ 国際子ども学校

- ・フィリピンの歌
- ・ダンス「江南スタイル」

⑤ PECLA (豊川市国際交流協会ラテンアメリカ部会 教育プログラム「ペクラ」)

- ・朗読「ペルー文化と歴史」
- ・ダンス、歌「ペルー文化と地理」



フロンティアとよはし



IPE QUINA



華豊の友



国際子ども学校



PECLA

【各教室の保護者及び指導者、参加者の感想】

- ・歌やダンスを通して言葉を学ぶことは、子どもの興味を引き出すのに有効であることを学んだ。子どもたちが楽しそうに授業に参加していた姿が印象的だった。(保護者)
- ・他の教室の発表を見た後で、生徒たちは、自分たちの発表を振り返って反省し、次回

の発表会に向けて話し合いをしている姿が見られた。(指導者)

- ・中国の子とペルーの子が司会進行を担当しているのを見て、「次回は自分がやってみよう」という子どもがいた。(指導者)
- ・こうした情報交換の場がもっと増えれば良い。(指導者、保護者、参加者)
- ・子どもたちが、自分の国以外の国のことを知ることができて、とても良かった。来年度も、ぜひ開催して欲しい。(保護者)
- ・会場が少し小さかった。(指導者)
- ・できれば、靴を脱がないでダンスが踊れるような会場にして欲しい。(指導者)
- ・プログラム予定時間と実際がかなりずれたので、時間配分を考えたほうが良い。(指導者)
- ・行き帰りの道中も、子どもたちはとても楽しんでた。(指導者、保護者)
- ・教室の枠を越えて、みんなで踊ったダンス「江南スタイル」は感動した。一体感が生まれてよかった。(保護者、指導者、参加者)



司会を母語教室の生徒が担当



教室の枠を越えたダンス「江南スタイル」



ブラジル、ペルー、フィリピン、中国…

県内5つの母語教室の子ども、保護者、支援者が一堂に会し、熱気あふれる会場

# VII. まとめ

愛知 外国につながる子どもの母語支援プロジェクト

川口 祐有子

(所属 NPO まなびや@KYUBAN)

事業の成果を報告する前に、私が本事業の中で体験した、印象的なひとつの出来事をお話ししたい。その日、私は、ある母語教室を見学していた。それは5歳児から7歳児を対象にしたクラスで、15人近くの子どもたちがアルファベットの書き方や読み方を学んでいた。授業の最後に、みんなで楽しく母語で童謡を歌っていると、途中でひとりの6歳の男の子がワアンワアンと泣き出して、先生に抱きついてきた。「ママー！ママー！ママに会いたいよ」「ママ、帰ってくるのが夜なの、いつも会えないから、おしゃべりできないの！」「会いたいよママー、寂しいよ！」

先生に抱きつきながら母語で叫ぶその姿を目にして、私は胸が苦しくなった。涙がじわっとこみあげてきた。抱きつかれた先生は、その子の頬に優しくキスをして、ギュウと抱きしめながらこう言った。「寂しいとき、私も友達も傍にいるよ。あなたのことを大切に思っているよ。私はあなたのこと大好きだよ。」

日本の保育園に通っているその子は、故郷の童謡を耳にするのが久しぶりだったのかも知れない。母親が以前歌ってくれた歌を、そのときの温もりを思い出したのだろうか。私はその日、母語教室の役割と存在の必要性をあらためて実感した。温かい言葉とともにぎゅっと抱きしめられたい子どもがいる。自分の思いをはき出せる人を求めている子どもがいる。母語教室は、そういった子どもにとって、救いの場になりえるのではないだろうか。言葉を教える場だけではなく、子どもや保護者にとって心の支えの場でもあり、本報告書の第2章で塚原氏が述べているように、「子どもが安定したアイデンティティを得ることを助ける」、とても重要な場なのではないだろうか。

しかしながら現状では、地域の母語教室はさまざまな課題を抱えている。愛知県より「外国人コミュニティ母語教育等支援事業」を受託してからの4ヶ月間、私たちは愛知県内を走りまわり、さまざまな地域の母語教室を訪問した。それらの団体に聞き取り形式で現状調査をする中で見えてきたのは、どの教室も概ね共通の課題を持っていることであった。

それは、指導者の不足、教材の不足、運営ノウハウの不足である。指導者については、指導技術を持つ人がいない、指導技術がある人がいてもボランティアベースでは活動してもらえない（つまり無償や安い謝礼金では協力してもらえない）といった声が聞かれた。

教材については、「母国から子ども向けの言葉の教材を手に入れることはできるが、日本で生まれて、日本で育った子どもに対応している教材がないため、たいへん苦労している」といった声が多く聞かれた。

そして、運営ノウハウについては、ずばり、「授業料」についての悩みが多く聞かれた。授業料はできるだけ安くしたい、しかし安ければ指導者に謝礼金が支払えない、仕方がな

いので授業料を高くする、すると参加者が激減する、といった悪循環に陥っている団体も少なくなかった。助成金や補助金の申請をしてみてもと提案したが、「そういったお金の情報はどうやって手に入るのか知らない」「そもそも申請が日本語なので、自分たちではできないだろう」という答えが返ってきた。

しかし、そのような団体ばかりではなかった。県内の母語教室の中には、行政や日本人の協力を得ながら、助成金を利用して活動している団体もあった。また、手作りしてきた教材をまとめて、冊子にしている団体もあった。出張授業もやりますよと言ってくれた指導者もいた。今後は、このようにノウハウや人材を持っている団体とそうではない団体とをつなげ、情報や人材を共有する必要があるだろう。そして、助成金や補助金の申請サポートの必要もあるだろう。

また、本事業で作成した「母語教育サポートブック」は、愛知県内で活動している母語教室や多くの保護者らの多大な協力を得て作成することができた。特にデザインに関しては、「硬い感じのものより、手に取りやすい雑誌風の方が良いだろう」という保護者のアイデアを多く取り入れて作成している。写真を多用し、「読んでみようか」と思わせるデザインに仕上がったのではないだろうか。残念ながら、今回は時間的な制約があり、外国人学校や民族学校、行政が実施している母語教室について深く掘り下げることができなかった。また、在日コリアンなどのオールドカマーの継承語教育についても触れることができなかった。プロジェクトとして来年度以降も発行していく予定の母語教育支援の冊子では、これらの活動や継承語についても採り上げていきたいと考えている。

同じく、事業の一環として、平成 24 年 2 月 24 日（日）に開催した母語教育実践報告会では、講師として特定非営利活動法人コリアンネットあいちの金氏と特定非営利活動法人 ABT 豊橋ブラジル協会の大河氏、稲垣氏を迎え、母語教育の実践と課題についてお話をうかがった。両団体は、前者はオールドカマー、後者はニューカマーの当事者が運営している、愛知県を代表する団体であるが、三氏それぞれが母語教育への熱い思いを語ってくれた。特に金氏の、「在日コリアンの子どものなかには、韓国朝鮮語の教室に通うことを友人に知られたくない子どももいる」「本名や国籍を友人に知られたくない子どももいる」というコメント、稲垣氏の「先生と子どもの挨拶はハグ。『ブラジル』を感じてもらえるよう、雰囲気づくりを大切にしている」「母語を学ぶことを親に強要することはしない。それぞれの家庭には、それぞれの事情があり、それぞれの考え方がある。でも、子どもが母語を学びたい、親が母語を学ばせたいと思ったときに、私たちは全力で応援する」というコメントが印象深かった。この報告会を終えて、私は、「偏見なく、子どもが学びたい言葉を学ぶことのできる社会環境を作る必要がある」こと、「保護者や子どもの考えや気持ちに寄り添う」こと、参加者の感想より、「アイデンティティは国籍や言語だけではなく、多様な要素で築かれてゆくものである」ことを学んだ。

そして、平成 25 年 3 月 3 日（日）に開催した母語教室交流会は、たいへん盛況であった。さまざまな教室の多様な国籍の子どもたちが混ざり合い、笑顔を交えて交流を楽しんでいた姿が印象的であった。交流会終了後、参加した子どもたちや保護者らから、来年度もぜひ開催して欲しいという声も聞かれた。今後はこのような、子ども同士の交流促進事業や

子ども向け冊子の作成にも積極的に取り組んでいきたい。

以上に述べてきたように、4ヶ月間の事業であったため、私たちはやり残したことが多くある。本事業は今年度で終了してしまうが、「愛知 外国につながる子どもの母語支援プロジェクト」はこれからも継続して活動を行っていく。母語支援の取組みが促進されるよう、10年、20年と息の長い取組みをしていきたい。今後も、みなさまよりご支援、ご協力をいただければ幸甚である。

最後に、本事業にご協力くださった、すべてのみなさまに、心から感謝を申し上げたい。ありがとうございました、Obrigada、谢谢、Gracias、고맙습니다、Salamat !